

翻訳:

スルタン・ヴァラド著『マアーリフ』

第4章, 第5章翻訳

Translation of Chapter 4 and 5 of Sultān Valad's *Ma'ārif*

井上 貴恵

Kie INOUE

I. 解題

『マアーリフ』第4章, 第5章について

本稿はバハーウッディーン・ムハンマド・ヴァラド (Bahā' al-Dīn Muḥammad Valad d. 1312) 著, 『マアーリフ』第4章, 及び第5章の翻訳である⁽¹⁾。

第1章, 第3章と同じく, 第4章は聴衆からの質問にスルタン・ヴァラドが答える形で進行する。第3章の質問は, 禁止されているサマーを修行者が行うことの是非を問うものであった。この問いに対しスルタン・ヴァラドは, 神の選良である聖者や預言者であれば, たとえシャリーアに反する行為であったとしても, その実それは真の信仰行為である可能性があるとして, 預言者や聖者の常軌を逸したように見える行動の真意を解き明かしている。

続く第4章の質問も第3章と同様の観点から, 預言者や聖者の非常識な行動を問うものである。第3章と同じくスルタン・ヴァラドは, やはり預言者や聖者の非常識な行為については, 非常識に見えるだけで, 真実はそうではないとの回答に徹している。第4章, 第5章では善と悪への言及が豊富に見られ, 前者の例としてスライマーンら歴代の預言者や聖者らが, 後者の例としてイブリース, シャイターンが幾度も登場する。ここで披露されるスルタン・ヴァラドの善悪観は, 父ルーミー (Jalāl al-Dīn Rūmī d. 1273) の思想を単純に踏襲したのではない独自性に富むもので, 注目に値する。スルタン・ヴァラドによれば, 善と悪とは当初すべてが「一様」に善いものに見えるが, 預言者や聖者の登場によって, 善に潜んでいた悪が暴かれるという。父ルーミーのもとにシャムセ・タブリーズ (Shams al-Dīn Muḥammad Tabrīzī d. 1247, 以下シャムスと表記) という希代の聖者の登場したことで, ルーミーの周囲にいた「善人」から悪人が現れ, それが元でシャムス自身がコミュニティ追放の憂き目にあったという教団内で起きた一連の事件をスルタン・ヴァラドが当事者として体験していた点を考慮すると興味深い。「善人のふりをした悪人」という現実的なテーマと, 預言者, 聖者という現実離れた存在との関わりに

⁽¹⁾スルタン・ヴァラド, 及び『マアーリフ』については井上2020を参照のこと。

ついて、彼独自の思想が存分に展開されている章である⁽²⁾。

II. 翻訳

4章1節

とある人が尋ねた。「では、[聖者や預言者など神の選良が] 為すことは何でも許されている (ravā) のですか。[選良らによって] 曲がったこと (kazh) が行われた場合も正しいと言い、そのように思うべきなのでしょう。私は [以下のように] 答えた。「神の人 (mard-i khudā) は何を行っても正しい。たとえ無知な者には不正に見えたとしても。[それは以下と] 同様である。カアバの中にいる人は、その方向がキブラなのだからどの方向へでも顔を向けて礼拝 (namāz) することができるのである。顔を東に向けようと西に向けようと、あるいは左だろうと右だろうと、前だろうと後ろだろうと、すべてキブラなのであり、その人の礼拝は神のもとで受け入れられよう。カアバの中においては、いかなる方向も他の方向と違いはないのである。左は右と同じ宿場 (manzilat) であり、東の方向は西の方向と同じ段階 (martabat) なのである。しかしながら [預言者や聖者とは違い、] カアバから遠くある被造物については、そのキブラは1つの方向、つまりカアバの方向である。カアバの方向であるこの1つの方向以外のどの方向へ顔を向けても、それはキブラから顔を逸らしているのであり、彼らの礼拝は許されず、受け入れられない。というのも彼らはカアバへ向かって礼拝していないからである。カアバというのはキブラを意味するのであるから、カアバの中にいる人はどの方向へ顔を向けてもキブラになる。

キブラの中にいる者にキブラの規則など無用

潜水夫にかんじき (pāchīla) が無くとも痛くも痒くもない⁽³⁾

もしも無知な人が、カアバの中にいる [人] が顔をカアバに向けずに [正しくない] 曲がった方向に向かって礼拝をしている、と見做すのならこの無知な人は誤りを犯している。キブラをキブラでない方向としており、正しいことを曲がったことと理解している」。

4章2節

世界は無限で終わりが無いのに対し、人の内面は1つの大きな町 [のよう] である。幾人かはその内面に我欲 (nafs) の王、つまりシャイターン、悪魔 (dīv) がいる。また幾人かはその内面にスライマーン王のように知性 ('aql) を有する。人々のうち神への服従 (tā'at) や、善

⁽²⁾ ルーミーとスルタン・ヴァラドの善悪に関する思想の相違点については Inoue 2022 を参照のこと。

⁽³⁾ ルーミー著『精神的マスナヴィー』(Masnavi-i ma'navi) からの引用である (Jalāl al-Dīn al-Rūmī 2011, 250)。

行を求める者は神の人 (mardān-i khudā) ⁽⁴⁾である。つまり、[そのような人の内面では] スライマーン王が支配者となり、神に助力を乞うこと (lā-ḥūl) やズィクルを行うこと、礼拝、断食によってシャイターンが疲労困憊する。信仰者であれば、心の底から魂込めてその王に付き従うことで悪魔は死に、存在しなくなり、スライマーンは難なく王位に君臨し、王となり、君主となる。シャイターンの効果がなくなり、慈悲深く慈愛に満ちた光が彼の内側に満ちてくると、スライマーンが行い、命じるすべてのことは、そうすることが正しい (ṣavāb) [ものとなる] だろう。というのもその [王が] 目標とするのは、それが神の光の御業に基づいており、闇を求めるようなものではないか、神の導きであるのか、シャイターンの罫ではないのかと自制し、用心することだからである。よってたとえその行いが外見上は罪 (gunāh) であり、不正 (zulm) であるかのように見えたとしても、スライマーンが望み、命じ、為すことはすべてそうすることが正しく、神への服従なのである。しかしながら不正や罪、善 (nīk) と悪 (bad), 正しいことと誤りとは被造物的な道である。創造主の道というのはこれらのことから免れている。「アッラーは御心のままになされる」(Q14:27) ⁽⁵⁾ [の通りである]。神の行為や神の為したことについて顧慮してみる [と以下は明らかである]。つまり何人たりとも誠実さと清浄さとして表れる [神への] 順従 (taslīm), [神に対する] 充足 (nizā), [神の] 受容 (qabūl) 以外に余地はないのである。これ以外であると考える者は皆不信仰者 (kāfir) であり [現世, 来世という] 2つの世界において拒否された者である。世の諸物の神への服従行為は、神の充足のためになされるのだから、すべて神の為すことは、そうすることが正しいのである。その人の内面にある王国から悪魔を退け、追い出した人は、その [人の内面の] 王国において神の命と神の願望だけを遂行する。よってこのような人が為すことというのはすべて正しい。雄々しい賢者が馬に乗った際、馬は彼に圧倒され、制されているので、馬の行くところはつまり、乗り手の行くところとなる。馬は自発的に草の方へ草を食みに、あるいは雌馬の方へ、馬の陰部の方へ、あるいは満腹になるために茂みや牧草地へ行き、草地は荒れ野となってしまう。よって馬が繁栄 (ābādānī) や善行、公共の福利 (maṣlahat) や利益の方へ行くとき、それは馬 [自ら] の行動ではないのは確かである。馬が公共の福利や利益について一体何を知っていよう。馬には愚かさ (kharī) と墮落 (gumrahī) の他にふさわしいものはなく、よって本当は家の方や町の方、庭の方へ [と馬が自発的に行ったのだとしても]、馬が [自ら] 行ったのだとは言わない。たとえ見た目には馬が [自ら] 行ったように見えても、乗り手がいるので馬の四肢は制御されており、よって本当はその [乗り手である] 賢者が行ったのであり、馬 [が行ったの] ではないのである。聖者らの心は神だけを求める。「信仰者の心は慈悲深きお方の二指の間にある。神はいかようにもそれを変化させる」⁽⁶⁾。[これをペルシア語に訳すと以下である。] 信仰者の心は神の力

⁽⁴⁾ 「神の人」については井上 2021 を参照のこと。

⁽⁵⁾ クルアーンからの引用の際は (Q) で示す。

⁽⁶⁾ 「アダムの子孫の心はすべて慈悲深きお方 (アッラー) の二本の指の間にある一個の心のようなものである。それで彼は自在にそれを変えることができる」のハディースを基にしたものと考えられる (ムスリム 2001, vol. 3, 579)。

という二指の間にある。神はその心を望んだように変化させる。もしもこの言葉が普遍的で、すべての人に当てはまるのであれば、信仰者に対して例外はないのである。よってかの心というものは神の道具であるのに、自分の心は神の手によるのではない、などと自ら思い込んでいるのである。馬も同様に乗り手の道具である。乗り手が行きたいと思う方へどこへでも行く。よってこのような信仰者は皆正しいのであり、彼は誤っていると思う者は皆、その人こそが誤りを犯しているのである。

彼らの前で誤りは誤りではない
 彼らの為すことはすべて正しい⁷⁾

5章1節

運動 (junbish) し、悲しみややすらぎの影響を受けたり、それらに自覚的である生き物に属する被造物 (makhlūq) は3種類に分けられる。まず、かの[神的な]世界やかの世界の状態に関し無知で、分け前に与ることのないものたちである。それは動物である。もう1つの種類は、現世には目もくれず、寝食の必要のないものたちである。彼らの力の源は神への服従とズィクルである。彼らはそれによって生きているのであり、それは魚が水によって[生きるの]と同様である。それは天使らである。もう1つの種類は、人間たちである。彼らは理性的動物と呼ばれ、彼らの知性と言葉は天使的 (malakī) でありながら、水と泥から成る彼らの身体は動物的である。ペン (qalam) は天使のもとにはなく⁸⁾、[天使らの]善行や服従への報酬もない。というのも彼らはそのような性分ではないからである。人間は甘いものを食べ、清い飲みもの[を飲み]⁹⁾、楽しみ、喜ぶ。天使にはかの地(来世)で報酬も報いもないが、実のところ天使らは、神に服従しているということがその報いなのである。また同様に動物のもとにもペンはない。動物は神への服従に値しないからである。なぜなら、[動物は]すべて身体に過ぎず、寝て食べるほかに何もせず、その他の何も知らないからである。人間はその半分が天使で、半分が動物である。半分が低く、半分が高い。半分が土の[ように卑しい]世界に属し、半分が清い世界に属するのである。

人間は驚くべき混ぜもの
 天使と動物からなる混ぜもの
 一方を少なくなるようにと望めば

⁷⁾ スルタン・ヴァラドの自作と思われる。

⁸⁾ 「筆によって[書くことを]教えられた御方。人間に未知なることを教えられた御方である」(Q96:4-5)の章句の通り、ペンは神が人間に与えた知恵や叡智の象徴である(本田2002, 876)。

⁹⁾ クルアーン47章15節「主を畏れる者に約束されている楽園を描いてみよう。そこには腐ることのない水を湛える川、味の変ることのない乳の川、飲む者に快い(美)酒の川、純良な蜜の川がある。またそこでは、凡ての種類の果実と、主からの御赦しを賜わる」等に見られる楽園の描写である。

もう一方へと傾いてしまう⁽¹⁰⁾

5章2節

よって、動物は土の上に住まうので蛇と同様であり、天使らは海の中に住まうので魚と同様であり⁽¹¹⁾、人間は海蛇 (*mār-māhī*) と同様、その半分の蛇性が土の世界を志向し、半分の魚性が海を求めるということを知れ。こちらの半分がもう半分と争い、戦っているのである。同様に [人間の内面という] 町においても、半分は不信仰者らであり、半分は信仰者らである。絶えずこの町においてはこれらの2つの勢力が争っている。信仰者らは不信仰者になってしまわないようにと願い、不信仰者もまた、同様に [信仰者になってしまわないようにと] 願うのである。

我々は願うが、また他の者も願う

誰の星回りが良く、誰が好まれることになるのか⁽¹²⁾

5章3節

しかし信仰者が優勢になると、たとえ町に不信仰者らがあふれていても彼ら (不信仰者ら) は打ち負かされ、町はすべて信仰者であるかのように言われる。というのも優勢となった [信仰者の] 判断は正しいからである。馬が乗り手に打ち負かされ、乗り手が馬よりも優勢となると、馬の行為は乗り手に付随したものとなる。たとえ外見上は馬が行くように見えても、賢者らは [こう] 言うのである。[あれは馬が行ったのではなく] 誰々がこれこれの町、これこれの村に行ったのだ、と。馬は荒野や牧草地に行くものであるが、町や家々の方へ行くのは人間の行為である。このような道、家、目的地 [へ行く際に] 馬は人間の道具となり、馬の足は人間の足となるのである。よって人間のうちで不信仰が打ち負かされ、自我が制御可能となった時、そのような人を敬虔な者というのである。たとえ彼のうちには悪魔がいたとしても、その悪魔は人間に制御されているので、むしろ悪魔というより天使なのである。以上の理由から選ばれし者 (ムハンマド) ——彼に平安あれ——はこうおっしゃったのである。「我が悪魔は我が手で信仰者となった」⁽¹³⁾。

⁽¹⁰⁾ スーフィーらが慣習的に引用する詩である。ジャーミー (‘Abd al-Rahmān Jāmī d. 1492) のものであるとする言及もあるが (Shaykh Bahā’ī 1984, 659) 定かではない。

⁽¹¹⁾ 天使と海、魚の比喩については以下の通り井上 2020 に訳出した『マアーリフ』2章14節などに詳しい。「ジブラーイールには神の顕現 [という役割] があつたが、彼はその [役割の] ために育てられたので、それ (顕現) 以外の仕事はないのである。[神との] 結合の海 (*daryā-i vaṣl*) の中で一生を過ごす魚と同様である」。

⁽¹²⁾ 『シャムセ・タブリーズ詩集』 (*Kullīyāt-i Shams*) からの引用である (Jalāl al-Dīn al-Rūmī 2015, 1413)。

⁽¹³⁾ 文中の表記からハディースであることが予想されるが、管見の限りスンナ派ハディース六書にはない。『精神的マスナヴィー』に引用されているハディースである (Jalāl al-Dīn al-Rūmī 2011, 733)。

悪魔も妖精 (parī) もその近くに居並ぶという
スライマーン王はお前だ、指輪をなくさぬよう⁽¹⁴⁾

5章4節

人間の本質は以下のようなものである。その玉座と良い星回りの下に天使ら、悪魔ら、妖精らが列をなし、召使いのように彼に仕えていた時のスライマーンである。そしてスライマーンの指輪こそが[彼の]信頼を担保していた。その時一人の悪魔は彼に魅了されていたが、[スライマーンではなく]スライマーンの指輪に[魅了されていたの]である。つまり外見や財、地位に魅了されると[人間の内面という]町はスライマーンに仕えた悪魔の如く振る舞い、また一方で天使の性質も人間の中に存在し、[その力が]優勢になったり弱ったりする。

内なる魂 (jān) は欠乏が、外身は充足が本性
悪魔は食べ飲むことが、ジャムシード (jamshīd) には空腹が相応しい
地においてお前のメシア (mashīh) を治療せよ
メシアが天を向けば、治療など必要ない⁽¹⁵⁾

スライマーンの思慮には悪魔と妖精とが存在したとしても、彼らは[スライマーンの]道具なのであるから、馬が乗り手の手中にあり、[馬が動くように見えても]その実人間の行為であると同様である。悪魔と妖精の行いはスライマーンの行いでもあるのだ。というのもスライマーンが[彼らを]制御しているのであり、彼の命に従って彼らは動いているからである。信仰者の我欲は、たとえいくつあっても知性の命令に従っているので、それは我欲と言われることはなく、知性と言われる。「信仰者の心は慈悲深きお方の二指の間にある。神はいかようにもそれを変化させる」⁽¹⁶⁾の通りである。[その意味をペルシア語に訳すと以下である。]信仰者の心は神の力である二指の間にある。その心を[神は]お望みの通りになさる。信仰者の心が動き、変わっていくのを見る者は、[信仰者自身の]心によってではなく、神によって[そうなるのを]見ることになるのである。天幕 (chādūr) や旗 ('alam) が空になびいている時、賢者らは、風がなければ天幕も旗もなびくことはないのであるから、それは風の動きによるものと理解する。したがって至高なる神も偉大なるご自身の言葉において以下のように命じている。「あなたが射った時、あなたが当てたのではなく、アッラーが当てたのである」(Q8:17)。[この章句をペルシア語に訳すと以下である。]ムハンマドよ、お前の射った矢はお前自身の弓から放たれたが、その弓を射ったのはお前ではなく私(神)である。というのもおまえは私の威厳を前にして死んでいたのだから。お前にはもはや存在も意志も動きも残ってはならず、私への

⁽¹⁴⁾ サナーイーからの引用である (Sanā'ī n.d., 647)。

⁽¹⁵⁾ ルーミー著『ルーミー語録』(Kitāb fih mā fih)からの引用である (Jalāl al-Dīn al-Rūmī 2008, 34)。

⁽¹⁶⁾ 本稿4章2節の訳にて既出である。

愛において避けようのない死を前に死んでおり, [死の状態から] 戻ってこなかった。「汝が死ぬ前に死ね」⁽¹⁷⁾ [の通りである]。死んだ者は動くことはない。もしも動くのならその動きは彼に由来するのではなく, 何者かが彼を動かしているのである。神のために死ぬ者は [その存在が] 残っておらず, [死の状態から] 戻ってくることもない。彼らは神の愛と威厳の中に消滅してしまい, ドアや壁のように何もなさず, 何も知らせることはない。もしも壁や山から声や会話が聞こえれば, 誰もがそれは何者かの声であり, 誰かが壁の向こうから叫んでいるのだと考え, 壁に叫ぶ能力があるなどとは思わない。よって聖者や預言者, シヤイフらは死の前に完全に死んでいるのである。

自我が消滅 (fānī) し, 神の内に存続 (bāqī) する
 こちらにはいないが, あちらにはいる⁽¹⁸⁾

声や話し声を聞いたのなら, 彼らの姿形については霊感的に知り得る。つまり, 彼らは [その存在が] 残っておらず, その場にはいないのであるから。壁から話し声を聞く例と同様に, 聖者らの話を通じ, どのようにあなたがそうなるのか, その状態があなたにどのような変化をもたらすのかを知るが良い。

5章5節

[上記のような状態になった] 結果として, 誰かが狂人 (parī zada) になった時には様々な言葉を口走るものだ。そのような状態でないのなら, そういった言葉は分からないし, 理解することはできない。[例えば] その人はアラビア語 (tāzī) で話すのだが, その人はクルアーンなどこれまで詠んだことがなく, 暗唱してもいないにも拘らず [クルアーンを] 詠むのである。皆は, この言葉は彼が言っているのではなく, 妖精が話しているのであると一致して言う。また同様にたつぷりと酒を飲み, 酔っ払った状態で我をも忘れて言葉を発した時, 賢者らは, 彼のものと思っはいけない, それは彼が言っているのではなく, 酒が言っているのだから, と言う。というのも妖精や酒にはこのような力があり, 人間を自らの道具とし, 人間の姿形を通じて言葉を語らせ, そのように言ったのである。人間が言ったのではないのなら, なぜ人間や妖精, 天と地, 玉座と絨毯 (arsh va farsh), 被造物と真理の創造主である神 [の言葉] ではないなどということがあろうか。神は人間を道具 (ālat) として使い, 人間に語らせるが, あいだに人間はおらず, その言葉は [それを通して神へと至ることができる] 門 (madkhal) では全くない。完全にその言葉は神の言説なのである。同様にクルアーンは選ばれし者 (ムハンマド) ——彼に平安あれ——の口蓋, 口, 唇, 舌から声や言葉, 音を伴って発せられたが, それは神

⁽¹⁷⁾ 文中の表記からハディースであることが予想されるが, 管見の限りスンナ派ハディース六書にはない。スーフィーらが好むハディースであり, 『精神的マズナヴィー』にも引用されている (Jalāl al-Dīn al-Rūmī 2011, 946)。

⁽¹⁸⁾ ルーミー著『7つの説教』(Malālis-i sab'ā) からの引用である (Jalāl al-Dīn al-Rūmī 2020, 68–69)。

の言葉であると呼ばれ、ムハンマド——彼とその家族に神が祝福を与えますように——の言葉ではない。クルアーンはムハンマドの言葉であると言う者は誰でも不信仰者となる。「清貧の極みは神である」⁽¹⁹⁾。[その意味をペルシア語に訳すと以下である]。清貧が極みまで達した時、それはただ神である。神は唯一であり、「かれに同位者はない」(Q6:163)。これと同様の視点からマンスール [・ハッラージュ] は「我は真実在 (神) なり」と言っており、あるいはアブー・ヤズィード [・バスターミー] は「私の服の中には神しかいない」[と言ったのである]。清貧においてお前の自我がお前に対し何かの [影響を] 残す限り、お前は多神教徒 (mushrik) と呼ばれ、神の唯一性の世界において一神教徒とは見做されないのである。[多神教] にはロゴスの多神教 (shirk-i qālī) と陶酔的多神教 (shirk-i hālī) がある。ロゴスの多神教は神には息子があり、[それを神の] 同位者であると呼ぶものである。陶酔的多神教には自らの内に神以外のものを認め、神以外に頼るものがある。

高貴なる者がファナーの道のりを旅していた
 存在の海を渡ったその時
 彼の自我として一本の髪の毛だけが残った
 その髪の毛は貧者の目には異教徒の帯 (zunnār) であると映った⁽²⁰⁾
 昨夜夢で老翁が言った
 『我』と『神』とが一体となる愛の道を探求せよ
 私は言った、『神』と『我』とどちらなのか、
 これは全く誤りである、『汝』で問題は解決する
 すると「そうではない、すべては『神』によって解決する
 『神』と『我』とが一であると捉えるのは誤りの元である」と彼は答えた⁽²¹⁾

5章6節

「かれの御顔の外凡てのものは消滅する」(Q28:88)⁽²²⁾。この意味についてクルアーン注釈者らはこのように述べている。「ただ残存するのは神だけであり、神以外の、天使、妖精、預言者、聖者、信仰者、動物、鳥、下らぬもの、地と天、玉座と絨毯、すべては消滅し、残らない」。我々は神についてのこの言説、「かれの御顔の外凡てのものは消滅する」(Q28:88) は、[神の] 自慢や自惚れ、おごり高ぶり、慢心によって、残存するのは私なのだ、私以外はすべて消滅する、などと表明しているのではないと言っておこう。これは [神の] 慈しみであり呼びかけの言葉なのである。つまり、もしも残存したいのであれば、残るのは私なのであるから、私と結

⁽¹⁹⁾ 文中の表記からハディースであることが予想されるが、管見の限りスンナ派ハディース六書にはない。『シャムセ・タブリーズ詩集』などに引用されているハディースである (Jalāl al-Dīn al-Rūmī 2015, 742)。

⁽²⁰⁾ 『シャムセ・タブリーズ詩集』からの引用である (Jalāl al-Dīn al-Rūmī 2015, 1141)。

⁽²¹⁾ 「昨夜夢で..」以降はスルタン・ヴァラドの自作と思われる。

⁽²²⁾ 底本では (Q29:88) と記されているが、誤りである。

ばれていなさい。そして自我から脱しなさい。そうすれば私の自我があなたの自我となるだろう。自我から脱し、私の自我があなたの自我となる。「私が下僕を愛すると、私はその耳となり目となり口となり手となる」⁽²³⁾ [の通りである]。[その意味をペルシア語に訳すと以下である。] 私が下僕を愛すると、彼の目は私であり、彼の耳は私であり、彼の口は私である。つまり「私を通して話し、私を通して見、私を通して聞く」のである。彼の発語は私なのであり、彼の口を通して私が話すのである。彼の眼光 (nūr-i chishm) は私であり、私を通して彼は物を見るのである。彼の耳もまた私であり、私を通して彼は聞くのである。このように、彼は初め卑小なる魂 (jān-i juzvī) によって生きているのだが、かの [大いなる] 魂から眼光を得て、聴覚の光と知識と知力と言語の光を、かの [大いなる] 魂から得たのである。[元は] 大海の一滴である彼の卑小なる魂が大海と結ばれ、離別のヴェールが間から取り払われた後は、彼の魂は私なのである。彼の動き、人生、見ること、聞くこと、運動と静止 (ḥarakāt va sakanāt) はすべて私を通してのことなのであり、彼は神によって生きる者となる。このような状態になった時、彼は死ぬことがなく、私と共に残存するだろう [という意味である]。また同様に、大海の水から隔てられ、器の中にあたり、散り散りになった水たまり (gūy) は、大海から離れたままになり、[そのような者は] 異邦人、敵対者、外部者と仲間である。[そのような者は] 刻一刻と [進む] 減退 (kāhish), 欠乏 (nuqsān) の中におり、その色も香りも味も減じて行く。[そのような人は] かの [大海の] 水である自我が消えうせ、風にさらわれ、日の光にさらされる。もしも至高なる神が、静穏なその水の表面に波濤をもたらすのならば、それは [神に] 魅了される完璧なシャイフの存在のことで、「一度でも神がその人の心を魅了 (jazba) するなら、[それは] 2つの信仰行為よりも良い」⁽²⁴⁾。シャイフと神による魅了とはいずれもかの大海の波なのである。この場合を除いては、水と泥 [つまり人間] の形で1つの波が立ち現れるのだが、その実 [シャイフと神による魅了とは] いずれもかの大海の波なのである。かの [大海からの] 一滴が、器から慈愛の海の波へと達すれば、かの [大海からの] 一滴は大海となり、その本質が損なわれることはない。「本当にわたしたちは、アッラーのもの。かれの御許にわたしたちは帰ります」 (Q2:156) [の通りである]。このようなことについて、一滴が大海へと達し、海の水で周りが満たされると、もともと海から来たものと [再び] 海へ戻ったものと同じになる。これは想像に難くない。預言者と聖者ら、信仰者の魂は、神の本質という太陽の光からの一筋 (shākh) である。「神は被造物を闇の中に創り、それから自身の光を投げかけられた」⁽²⁵⁾ [の通りである]。[被造物の] 外形の場は水と泥の世界に属していたので暗闇であった。創造に際し神は暗闇から [被造物を] 創造し、自らの光を注ぎ、振りまいたのである。これと同様に、天の太陽は自らの光を町や家、部屋へと注ぎ、その光は結局太陽自らの元へ戻るのである。太陽が天を宮 (burj) から宮へと移っていくのと同様である。その光線は家の中の部屋から部屋へと降り注

⁽²³⁾ ブハーリーのハディース集に収められている (ブハーリー 2001 vol. 5, 465)。

⁽²⁴⁾ 文中の表記からハディースであることが予想されるが、管見の限りスンナ派ハディース六書、及びスーフィー系ハディース集として知られる Furūzānfar 1956 の中にも見当たらない。

⁽²⁵⁾ ティルミズィーのハディース集に収められている (al-Timidhī 2004, no. 2642)。

ぎ、夜になると日の沈む方へと沈んでいく。[その時] 家の中に充満していた日の光、光線はすべて沈んでいく太陽へと戻っていく。同様に聖者らの魂は、残存する太陽の光線のようなのである。たとえ [光線が] 外形の部屋を照らし、照射しているのだとしても、[神という] 大本 (aşl) の太陽とつながっているのである。

我は汝から発した一筋の光
 太陽よ、私はどこにあらうと汝とつながっている
 太陽よ、暗闇の世界においても
 月光のように明るく照らそう⁽²⁶⁾

5章7節

月の明るさもまた太陽からのものである。月は太陽から光を得ているのだから、太陽から光を受けているということで、実は月の光もまた太陽の光なのである。被造物が栄光ある太陽の光を要求したとき、彼らは偉大なるお方の光を知らず、相応しくなく、耐えられそうになかったため、神は山を照らしたところ、「主がその山 [神の御光を] 現わして山を粉みじんにした」(Q7:143) [の通り山は] バラバラ、粉々になり、「ムーサーは [余りにも恐ろしいので] 気絶して倒れた」(Q7:143)。[この章句が意味するのは] つまり、神への愛の中でひずみ、弱ってしまった預言者、聖者らの魂を、神の光はご自身の美しく威厳ある光によって満たし、被造物を通して [ご自身の光を] 送ったということである。[預言者、聖者らの魂は] 外枠 (qavālib) を通しかの [神の] 光を得て輝く。しかし存在の暗闇と荒廃の中にある場合は、かの [暗闇を照らす] 月の明るさによって被造物は誤りの道を [神の] 導きの道であると見做し、認識する。そして悪を善であると思ひこみ、識別するのである。輝きの源泉は太陽であるという点で、天の星はシャイフに仕える弟子らのようである。「我が教友は星のよう。彼らは皆手本であり導きであるのだから」⁽²⁷⁾ [の通りである]。つまり太陽は源泉であり、他もすべて彼によって [輝いて] いるのである。満月は時のクトゥブ⁽²⁸⁾であり、慈悲の太陽の顛れである。一様に太陽の光によって満たされている星は、弟子と信仰者らである。樂園における存続とは神に到達することであるが、聖者らは慈悲の太陽の光の杯を有するので、損なわれることのない神の代理人 (khalīfa) らとなる。「本当にわれは、地上に代理者を置くであろう」(Q2:30) [の通りである]。[これは] 地上において神の代理人を見つけるだろう [という意味である]。しかし、たとえ姿形は地上における神の代理人であったとしても、それは天の代理人の意味なのである。水と泥 [、つまり人間] の姿形は地の住民らのキブラであり、その魂と心の無形の美しさは、天

⁽²⁶⁾ スルタン・ヴァラドの自作と思われる。

⁽²⁷⁾ 文中の表記からハディースであることが予想されるが、管見の限りスンナ派ハディース六書にはない。『ルーミー語録』に引用されているハディースである (Jalāl al-Dīn al-Rūmī 2008, 134)。11世紀のマーリク学派法学者 Ibn ‘Abd al-Barr (d. 1071) は同ハディースを「脆弱である」と紹介している (Ibn ‘Abd al-Barr 2013 vol. 2, 116-117)。

⁽²⁸⁾ 聖者のうちでも最上位に属する「枢軸」と呼ばれる者のことを指す。

の住民らの代理人 [の徴] なのである。このような理由で天の住民である天使らに命が下ったのである。「あなたがた、アーダムにサジダしなさい」 (Q2:34)。[その意味をペルシア語に訳すと以下である。] アーダムに跪拝しなさい。「それで天使たちは、イブリースを除き一斉にサジダした」 (Q15:30)。すべての天使らは神の命に従順 (muṭīʿ) で、自身の代理であり、導き手 [であるアーダム] に跪拝したのであった。つまりかのシャイフというのは地と天における神の代理人なのであるから、地の住民らにとっては彼に付き従うこと、彼に統べられることは義務 (farz) である。天の住民にとってもまた同様に [彼に従うことは] 義務である。また地上におけるシャイフである神の代理人の存在によって、真理に潜む偽りが明らかになる。あるいは曲がったことから真っ直ぐ正しいことが、善から悪が、よそ者から友人が、澱 (durd) から上澄み (ṣāf) が、良貨 (naqd) から不純な金銀 (qalb) が明らかにされる。[これらは皆] 夜の闇によって、また満月であるシャイフの不在によって一様と見做され、美と醜とはすべて同様であると思われていた。しかし満月であるシャイフの存在によって、すべての隠されたもの、覆われたものは明らかに見いだされたのである。

聖者という太陽が現れ

「邪な心よ去れ、清らかさよ来たれ」と言った⁽²⁹⁾

正直なる者アブー・バクルはアブー・ジャフルと区別され、天においてもイブリースは天使から区別された。よってあの世とこの世とは神の代理人であるシャイフの存在によって美しく洗練され、栄え、繁栄するのである。しかしその実、満月は神という太陽から光を受けているのだから、これらはすべて神の行為なのである。至高なる神は、シャイフという姿形で、時に媒介を伴って、時に媒介なしに、[その] 神性を行使しているのである。神こそは最もよく知り給う。

参考文献

- Furūzānfar, Badīʿ al-Zamān. 1956. *Aḥādīs-i Maṣnavī*, Tih-rān: Intishārāt-i Dānishgāh-i Tih-rān.
- Ibn ʿAbd al-Barr. 2013 or 2014. *Jāmiʿ bayān al-ʿilm wa-faḍliḥ*, 2 vols, Bayrūt: Dār Ibn al-Jawzī.
- Inoue, Kie. 2022. “The View on Virtue and Vice by Sulṭān Walad: A Comprehension of Iblīs.” *Journal of Institute for Sufi Studies*, vol. 1, Institute for Sufi Studies, Üsküdar University, pp. 15–26.
- Jalāl al-Dīn al-Rūmī. 2008. *Kitāb fih mā fih*, ed. by Badīʿ al-Zamān Furūzānfar, Tih-rān: Intishārāt-i Zavvār.
- . 2011. *Maṣnavī-i maʿnavī: Hamrāh bā Kashf al-Abyāt*, Tih-rān: Hirmis.
- . 2015. *Kullīyāt-i Shams*, ed. by Badīʿ al-Zamān Furūzānfar, Tih-rān: Intishārāt-i Dānishgāh-i Tih-rān.
- . 2020 or 2021. *Majālis-i sabʿa: bar asās-i nuskha-i Mūza-i Mawlānā*, ed. by Salmān Mufīd, Tih-rān: Intishārāt-i Mawlā.

⁽²⁹⁾ スルタン・ヴァラドの自作と思われる。

- Sanā'ī al-Ghaznavī. n. d. *Dīwān-i Ḥakīm Abū al-Majd Majdūd ibn Ādam Sanā'ī Ghaznavī*, ed. by Mudarris Rizavī, Tīhrān: Kitābkhāna-i Sanā'ī.
- Shaykh Bahā'ī. 1984 or 1985. *Kashkūl*, trans. by Bahman Rāzānī, Tīhrān: Intishārāt-i Arastū.
- Sulṭān Valad. 1988. *Ma'ārif*, ed. by Najīb Māyil Haravī, Tīhrān: Intishārāt-i Mawlā.
- Tirmidhī, Muḥammad ibn 'Īsā. 2004. *Sunan al-Tirmidhī*, al-Qāhira: Dār Ibn al-Haytham.
- 井上貴恵. 2020. 「スルタン・ヴァラド著『マアーリフ』序文, 第1章及び第2章翻訳」, 『イスラム思想研究』第2号, 71-89頁, <https://doi.org/10.15083/0000054056> (2022年7月31日最終アクセス).
- . 2021. 「スルタン・ヴァラド著『マアーリフ』序文, 第3章翻訳」, 『イスラム思想研究』, 第3号, 123-139頁, <https://doi.org/10.15083/0002000997> (2022年7月31日最終アクセス).
- 日本ムスリム協会. 2004. 『日亜対訳注解聖クルアーン』, 日本ムスリム協会.
- 本田孝一. 2002. 「ペン」, 『岩波イスラーム辞典』, 大塚和夫ほか(編), 876頁, 岩波書店.
- ブハーリー. 2001. 『ハディース: イスラーム伝承集成』, 牧野信也訳, 全6巻, 中央公論新社.
- ムスリム. 2001. 『日訳サヒーフ・ムスリム』磯崎定基他訳, 全3巻, 日本サウジアラビア協会.

明治大学文学部心理社会学科 専任講師
Senior Assistant Professor, Department of Psycho-Social Studies,
School of Arts and Letters, Meiji University